

牟田和恵『戦略としての家族』  
— 近代日本の国民国家形成と女性 —

(1996 新曜社・216P ISBN4-7885-0566-5 2,200円)

こだま りょうこ  
小玉 亮子



本書が刊行されてから二年たつ。この間すでに、本書は多くの機会に紹介され、丁寧なそして内在的な書評がなされてきた。そして今では、近代日本の家族について論文を書こうとするものが、必ず参照する先行研究ともなっている。このように、わずか二年の間にさまざまな議論を重ねられてきた本書について、いま、新刊紹介ではない書評として、どのように論評することが、より活性化した議論を展開することにつながるのだろうか。

本書は、近代日本の家族について、明治期を中心に、総合雑誌、修身教科書、「女性の言説」、ジャーナリズム・教育論・小説といったものを素材として分析を行っている。その中で、戦後の家族研究において「家」が伝統的な家族として把握されてきたことを批判し、むしろ「家」のなかに近代的な要素があることを浮かび上がらせることが試みられている。そこで、キーワードとなっているのが欧米の社会史研究の提起している「近代家族」である。

「近代家族」概念への着目は、著者自身が指摘するように比較史への一つの可能性を開くものである。そこで以下では、本書が家族に関する比較史の実践として欧米の社会史の諸研究の中でどこに位置づくの、そのマトリクスを描くことを試みたい。

<近代の相対化>

本書の冒頭にはPh.アリエスの『<子供>の誕生』（邦題）が挙げられている。このことが、本書のスタンスの一つを表明するものとなっている。というのも、確かに、アリエスの著書は家族史に決定的な影響を与えたものである。しかしながら、アリエスの分析手法は、あくまで一方法にすぎないし、それが提示したテーゼは、いまだ多くの批判、論争の中にある。そのような中で、本書は、アリエスのスタンスを継承しようとしていることをあえて表明しているのである。

アリエスの議論それ自体は矛盾だらけで非常に複雑であるが、本書がそこからすくい上げているのが以下の三点である。第一に、「われわれが自明とする家族のあり方は近代の歴史の中で『創造』されてきたもの」(i)であるということ。第二に「近世の初頭の教育的配慮の出現、

つまり、『子どもとは弱く、純粹無垢な存在であって特別の保護と教育を必要とする』とする観念の発生が社会を変革する」(p.7)というものである。そして最後が、「アリエスは近代において起こったのは個人ではなく家族の勝利であると述べている」(p.38)という部分である。これらは、それまでの家族史の常識をくつがえす重要な視点を提供するものであった。本書はまさに、アリエスの議論のうち家族を相対化する視点を継承している。

しかしながら、そこでは単なる継承がなされたのではなく、もう一つ別の視点が交差されている点は重要であろう。例えば、近代の「教育的配慮」の出現について、ショーターの議論を重ね合わせながら、その核を母子関係にあると解釈している点や、近代の「家族の勝利」という点については、「勝利したのは自立した個人、すなわち『市民』たる男性家長と彼に率いられる家族であったのだ」(p.38)と説明している点に見ることができる。

確かに、アリエスの研究は近代の「教育的配慮」によって母子関係の変容がきわめて重要な役割を果たしたことを明らかにするものである。しかしながらそこでは同時に、モラリストの言説分析や近代学校の系譜が果たした役割にも大きな注目を払っている。アリエスの著書は子ども、学校、家族の三部構成となっているが、そのうちもっとも多くを費やしているのは、実は学校に関する部分である。あるいはまた、アリエスの議論は、確かに家族が勝利したことを主張したが、その分析で、家族の中の「家長」と他のメンバーとの非対称的関係を論じているわけではない。

<フェミニズム>

こうしてみると、本書がフェミニズムの視点を交差させたうえで、アリエスを継承していることがわかる。この点で、本書の議論は、アリエスの議論それ自身よりも、フェミニズムの視点からそれを読み込んだバダンテールのものに近い。

実はもともと、近代家族論とフェミニズムの関係は、相容れないものであった。例えば、近代家族研究の第一人者の一人であるT.ハレブンはかつて、家族史がフェミニズム的な議論になる「おそれがある」という発言を行

っていた。バダテンールの研究は、そもそも歴史研究とはみなされていなかったという側面もあるが、家族史研究の中でしめる位置は当時例外的であったといっても過言ではない。

確かに、アリエスの議論と現代フェミニズムの議論は、近代を相対化する視点をもつという点において、また、対象を本質論ではなく社会的に構成されたものとして見るという点において—例えば、子どもや親子関係のありようを普遍化して論じないというように—、交差する地点を持つものである。本書はまさにそこに位置する。しかし、アリエスの議論それ自体に、男と女という非対称の関係を分析する視点が打ち出されているわけではない。この点において、本書とアリエスの分析視角とは決定的な相違があるといえよう。

ただ、欧米の社会史における近代家族研究とは異なり、日本における近代家族研究は、はじめからフェミニズムと結びついて展開されてきた。落合恵美子の著書『近代家族とフェミニズム』（1989）は、それが刊行された少し前なら、欧米ではかなり意外性のあるタイトルだったといえるのではないだろうか。日本において近代家族研究はそれが注目された当初から、フェミニズムを排除しない議論として、また、その後の展開はもっぱらフェミニズムの議論との密接な関連の中にあつた。こうしてみると、本書は近代家族論の日本的展開の潮流の中にあるとすることができるだろう。

#### <ナショナリズム>

さて、本書が理論的に多くを負っている社会史は、もともと政治史や事件史といった従来の歴史学にたいする批判として展開してきたものである。例えば、アリエスの研究に国家が登場しないのは、もちろん、それが扱った時代が近代の国民国家の成立以前であつただけでなく、そもそも国家論的視点がそこに含まれていないことによる。ところが他方、本書は、その副題を「近代日本の国民国家形成と女性」としているように、むしろ国民国家形成を主題とした研究である。このことは、逆に、家族と国家の関係分析に重点をおいた日本の従来の家族史研究の流れの中に、本書を位置づけることを可能とする。とはいえ、本書は、近代において家族が国家の一方向的な管理の対象となってきたという見解に賛同しない。むしろ、「家族が心性、情愛のレベルで凝縮度を高め家内性（domesticity）を涵養していく、階層を超えた家族自体の内発的な変容がこれに呼応し促進しさえするのである」（p.79）という。

この近代の性とモラルの管理の拠点としての家族を位置づける視点は、本書において理論的にはドンズロやモッセといった国家論を射程に入れた1970年代以降の研究

に依拠しつつ展開される。ドンズロの研究で注目される点の一つは、国家の性、健康、モラルの管理の戦略的拠点となつた家族が、国家に一方的に介入され利用される客体ではなく、むしろ、それを積極的に欲望することを明らかにした点にある。本書が分析対象を啓蒙と知識人のデイスクールとした点は、モッセのセクシュアリティ研究に近いが、分析の視点はドンズロのそれに多くを負っている。

特に本書の論点と関連するところで、ドンズロは近代において子どもや女性の権利という思考それ自体が管理の戦略として機能することを明らかにしたが、そこではフェミニズムもまた、性やモラルの新しい規範を支えるものであつたことを論じている。このことは、まさに、本書が「女性の近代におけるパラドキシカルな位置について論じた。女性たちの運動や果敢な努力が、ともすれば女性自身を縛り、封じこめていく可能性をもっていたことを示した」（p.193）点に重なり合うものである。本書あとがきにおいて、「歴史上の個々の女性たちや運動を批判するつもりはまったくなく、ということを改めて強調」しているが、むしろ、今求められているのは、まさに本書が試みた一面的な評価を排した家族や女性の歴史が提示する「パラドキシカルな位置」を丁寧に見ていくことなのではないだろうか。

近代の家族の相対化の視点のもとで、政治的装置としての家族を、そして女性のパラドキシカルな位置を浮かび上がらせた本書は、しかしながら、その過程において、アリエスが提起した家族と学校の関係、ドンズロが検討したソーシャルワーク等の子どもを取り巻く保護複合体、あるいは、モッセが扱った様々な男性組織、それらが提示する論点について必ずしも十分踏まえたとはいえないのではないのか。もちろん、対象が限定される以上、そこに選択があることは当然のことである。ただ、本書がジェンダー問題としてのみ家族に注目したことで、先行研究が近代の再生産装置がジェネレーション問題として同時に存在していることを論じた部分を後景に退かせることになったのではないのか。

本書が試みたような諸外国の研究の十分な理解と、そして一定のパターンや図式に一致しない矛盾の諸相を示していくこと。これを通じて、日本における近代家族のはらむジェネレーション問題もまた視野に入れて検討することが、近代家族をジェンダー問題として特化しない日本における新たな研究の展開へ導くのではないだろうか。もちろんそれは、本書に続く後続の私たちの課題に他ならない。

（横浜市立大学 助教授）